

# 魚病対策指導

見奈美 輝彦， 堀江 康浩， 宇野 悦央

昭和60年1月から12月までの病害検査状況は、養殖アユ142件、アマゴ5件（白点病、キロドネラ症、過食）、ニジマス1件（白点病）およびテラピア1件（原因不明病）であった。

養殖アユについての検査状況を表1に示した。ビブリオ病は28件（延べ13経営体）で本年も前年と同様に少い傾向にあり、細菌性鰓病は14件、その他（過食、水カビ病、ギロダクチルス症等）は100件であった。また、5月下旬から6月中旬にかけて導入された琵琶湖産種苗に、眼球の著しい突出と腹水の貯溜症状を呈する症例が数件みられた。本症は以前にも時折みられ、大方は自然に終息していたようである。

表1 養殖アユの病害検査状況

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
ビブリオ病		6*	1			15	3	2	1				28
		(3)	(1)			(4)	(3)	(1)	(1)				(13)
細菌性鰓病			6	8									14
			(3)	(3)									(6)
その他	8	10	26	25	5	6	10	2	1	2	0	5	100
	(4)	(6)	(11)	(10)	(5)	(5)	(4)	(1)	(1)	(1)	(0)	(4)	(52)
計	8	16	33	33	5	21	13	4	2	2	0	5	142

\* 件数（経営体数）

分離されたビブリオ病菌の中の14株について、スルファモノメトキシシンおよびオキソリン酸に対する薬剤感受性を表2、3に示した。海産種苗から分離された血清型C型の2株は、両薬剤に対し高い感受性を示した。A型の12株は1株が両薬剤に高い感受性を示し、11株がスルファモノメトキシシンに高い感受性を示した。

魚病対策事業に係る防疫会議は9月21日（和歌山市）に、また防疫検討会は11月12日（紀北地域、那賀郡桃山町）・13日（紀南地域、田辺市）に開催した。養殖場の巡回指導は60年4月から61年3月までに36回実施し、また養殖場の定期観測は5ヶ所で、水温・pH・DO・NH<sub>4</sub>-N・NO<sub>2</sub>-Nについて行った。種苗の魚病検査は2～6月に16件行い、1件（2月）からビブリオ病菌（A型）が分離された。養殖アユを対象とした医薬品残留検査は、6～7月にスルファモノ

メトキシシリン (20検体) およびオキシソリン酸 (5検体) について行い、いずれも残留は認められなかった。

表2 ビブリオ病菌の薬剤感受性

No	月・日	血清型	SMM	OA
1	2・18	A	卅	+
2	"	"	卅	+
3	3・13	C	卅	卅
4	21	"	卅	卅
5	6・12	A	卅	卅
6	14	"	卅	卅
7	"	"	卅	+
8	"	"	卅	卅
9	24	"	卅	卅
10	"	"	卅	卅
11	"	"	卅	卅
12	7・1	"	卅	+
13	4	"	卅	+
14	24	"	卅	+

\* スルファモノメトキシシリン

\*2オキシソリン酸

表3 薬剤感受性の類別

薬 剤		血 清 型	
SMM	OA	A	C
卅	卅	1*	2
卅	卅	5	
卅	+	6	

\* 菌株数